

『英雄叙事詩 アイヌ・日本からユーラシアへ』

萩原眞子・福田晃編
三弥井書店刊

書名の通り、日本における英雄叙事詩研究のひとつの到達点ともいべき本である。一九九一年にソビエト連邦が消滅し、モンゴル・中央アジア・ウラル地域の英雄叙事詩についての情報が飛躍的に増大してから三十二年。ついにここまで来た。

本書は福田晃・萩原眞子の共同編集である。日本におけるユーラシア叙事詩研究の第一人者である萩原眞子の「詠うことばの世界 アイヌからユーラシアへ」という巻頭言で日本と大陸の叙事詩の連続性という視点が提示され、福田晃が日本の語り物文芸における「英雄叙事詩」を実証的に探る。そしてそれらを受ける形でユーラシア大陸東部における連続性をテーマとする前半部が展開する。

福田晃による論考と百田弥栄子の中国における百合若譚型伝承の分布の提示は、大陸との関連において日本の叙事詩を考える、という方向性の好例である。金賛會による韓国の冥界下り説話に関する論考は、東アジアにおける連続性を考える上で重要なものである。韓半島はまさに日本とユーラシアをつなぐ位

置にあるという点からも注目される。

坂井弘紀はチュルク諸民族の英雄叙事詩のなかに百合若譚・甲賀三郎譚に類似する例をまとめて示し、さらにその類似を世界的に位置づけようとする。いずれも地理的分布やアールネ&トムソンによる話型の類型分類を念頭におきつつ、他地域との比較を試みるものである。

執筆陣はいずれも伝播の可能性については慎重だが、地域的共通性・話の共通性については積極的に認める。東アジア・中央アジアにおける連続性は少なくともここまでではなかったのである。

口頭伝承と文献資料の比較、細かな地理的分布から迫るアプローチは説得力を持つ。また坂井が指摘するように、世界的な話型分布を俯瞰する「世界神話」的アプローチはさらなる可能性を示唆してくれる。

後半ではユーラシア大陸各地の叙事詩の多様性と類似を紹介する総論、最新の論文が並んでいる。金賛會は12世紀成立の「東明王篇」を始めとする説話を「英雄叙事詩」として位置付けて分析を試みる。

百田弥栄子はチベットのケサル叙事詩、モンゴルの『ジャンガル』、キルギスの『マナス』および中国領内の叙事詩をコンパクトに

まとめて概説、西双版纳(シーサンパンナ)傣(タイ)民族の叙事詩を紹介している。

上村明はケサル叙事詩からモンゴル西部の叙事詩について、実際の語りの在り方も含めてやや詳細に紹介する。三宅伸一郎はケサル叙事詩を文化的背景から解説する。

坂井弘紀は16世紀のカザン・ハン国滅亡を語るチュルク諸民族の叙事詩「チョラ・パトル」を紹介する。萩原眞子はサハのエヴェンキの叙事詩「イルキスモンジャ勇者」を解説付きで抄訳している。広大なチュルク・モンゴル・トウングース世界を東アジアと連続して眺める視点は、本書ならではのであろう。

各論文は研究者向けの話題を扱ってはいるが、取り上げる叙事詩のあらずじや部分訳等を必ず含んでおり、専門家でなくとも読みやすいものとなっている。

英雄叙事詩を文学作品としてみた場合は他にもさまざまな切り口がありうるだろう。だが、あえて禁欲的に研究テーマを絞ることで、総括的な論文集に仕上がった良書である。

(丹菊逸造)

(二〇一八年十月/本体三五〇〇円)

『日本現代怪異事典』
副読本

朝里樹著 笠間書院刊

この二冊は、破竹の勢いでベストセラーを連打する在野の怪異研究者によるデビュー作とその「副読本」である（以下『事典』『副読本』と略す）。

『事典』の原型は、ツイッター上などで創作活動を続けていた著者が、私家版として二〇一七年に世に問うた同名書である。私家版『事典』は、現代日本を舞台とした怪異事象の包括的な集成を目指したもので、いわゆる「学校の怪談」や「都市伝説」、「怖い話」、「怪談実話」などの世間話や怪異譚に現れる不思議で怪奇なものが数百にわたり立項されている。妖怪・怪異事典は数多あれど、現代に特化してこれほど網羅的な事典は存在せず、それもあって同書は大きな話題となった（なお本稿筆者は「世間話研究」二五号に拙評を載せている。私家版に対する批評は『事典』にも共通するので、同誌も参照されたい）。

この私家版『事典』は、研究グループ「異類の会」を通じて出版社の編集者に紹介され、項目を大幅に増補したものが世に出た。それが二〇一八年刊の『日本現代怪異事典』であ

る（全一〇九二項目）。

先述のように、「事典」は現代日本で知られている怪異事象を網羅しており、この分野のリファレンスブックとしてきわめて有用である。特に「口承」に限らず、インターネット上で生まれ広まっているものも、主要なものが収録されている点は重要である（惜しむらくは、出典のURLは載せておくべきだった）。

こうした内容面での充実とは別に面白いのは個性的な索引づくりである。見てみると、五十音順のほかに「類似怪異」「出没場所」「使用凶器」「都道府県別」の各索引がある。「類似怪異」は「何らかの特徴的な共通点がある怪異が五例以上見られたもの」によって配列した索引で、たとえば「こっくりさん」のような「降霊占いの怪」、きさらぎ駅などの「異界駅の怪」がまとめられている。「使用凶器」は怪異が危害を加えるための手段による配列で、「口裂け女で有名な「鎌」から「栓抜き」「生卵」といったものまである。

翌二〇一九年に出た『副読本』は、形式的には「事典」の索引を大きく展開し、一冊にまとめたものと言える。「特集 日本現代怪異を知る」「第1章 類似怪異」「第2章 出没場所」「第3章 使用凶器」「第4章 都道府県別怪異」「第5章 『日本現代怪異事典』

拾遺」という章立てからもこの点はいかがやう。各章は「異界駅」や「鎌」「トイレ」などのキーワードをもとに、朝里氏がじっくり考察を加えたものになっている。結果として、現代怪異に関する基本的な論点が抑えられたものになっているので、今後の研究のための土台となるだろう。ただ、「平和な時代だから怪異が語られる」や「女性の怪異が多いのは父系社会だから」のような、厳密に検証されているとは言えない通説がそのまま載っている点には注意する必要がある。また「副読本」として解説書を著すならば、ブックガイドの章があってもよかつたかもしれない。

『事典』『副読本』の双方に欠落しているものについて、一つ指摘しておく必要がある。それは、「日本」という枠組みからアイヌ、在日コリアン、在日外国人などの伝承が抜け落ちているということである。この点はむしろ「日本現代怪異」研究ジャンル全体の問題と言えるかもしれないが、著者が北海道生まれであるからこそ、逃してもらいたくない点ではあった。

いずれにしても、「事典」「副読本」は、このジャンルの研究や創作全体に大きく寄与するものとなるだろう。

（二〇一八年一月／本体二二〇〇円）
（廣田龍平）

（二〇一九年六月／本体一八〇〇円）

「東の妖怪・西のモンスター」 想像力の文化比較

徳田和夫編 勉誠出版刊

本書は学校法人学習院の国際共同研究が催した「東の妖怪・西のモンスター」の成果をまとめたものだという。編者による序言および総論「怪異と驚異の東西―妖怪とモンスター」に続いては全四部立てで、様々な分野の執筆者による十一本の論考が展開される。

「第一部 怪談と怪物」の小松和彦「二つの「二つ家」―国芳と芳年の「安達ヶ原」をめぐって」は、「安達ヶ原」を題材に描かれた国芳と芳年の浮世絵を様々な資料から読み解き、その文化的背景を明らかにする。続く尾形希和子「驚異から警告まで―西洋の怪物表象」は、西洋社会における monster の語源と意味の変遷に迫った上で、東西の文化的土壌と、怪物的な存在を指す名称との相関関係に想いを馳せる。

「第二部 東西に照らす」の徳田和夫「妖怪・モンスターの攻略―鏡の呪力伝承を通して」は、東西の説話・伝承における「鏡」の力に着目し、双方の共通点と相違点を明らかにした。続くマテイアス・ハイエク「妖怪概念のグローバル化の試み―南フランスの妖怪を中心に」は、日本の研究シーンで醸成されてきた学

術用語としての「妖怪」(Yokai) 概念を諸外国の類例を分析する際に用いる方法を提示する。本書全体の試みとも呼応する重要な視点である。ケラー・キンブロー「本の妖怪、妖怪の本

―東西の付喪神考」は、コッローディ「ピノッキオの冒険」の「ピノッキオ」およびゲート「魔法使いの見習」の「箒」というのちにデイズニー映画で新たな命を吹き込まれることになる動く器物を発端に、日本における付喪神、さらには地藏菩薩像の体内に収められた絵本が持つ意味へと連想の翼を広げていく。木村慧子「蛇女の変容」(レイミア)と「蛇性の姪」の場合)は、宿命の女としてのレイミアから日本の蛇女へと視線を移し、東西の蛇女に刻印された、人間が容易に制することのできない自然の驚異を見出している。

「第三部 思想の響き合い」の根占猷「『平田篤胤における実在と不在をめぐる問題―特に靈魂不滅との関連』」は、篤胤「本教外編」へのキリスト教神学からの影響を軸に、彼の靈魂観への再検討がさらに深められるべきであることを示した。山本陽子「光るものは奇跡か妖怪か―和洋・神仏における発光するものへの好悪感覚の相違」は、宗教画などにおける光の描写が持つ特別な意味から疑問をスタートし、近世から近代にかけての日本美術

における目の光(黒目のハイライト)が、不気味さの表現から生命力の表現へとシフトしていく過程を浮き彫りにした。

「第四部 東の観想」の伊藤信博「水陸斎・水陸斎図、掲鉢図からみた植物の擬人化の様相」は、室町期における植物の擬人化が、中国の絵画や「草木国土悉皆成仏」思想などの影響を受けつつ生成してきた様子を丁寧にとまらげず。岩崎雅彦「中世の妖怪―鵺」と「土蜘蛛」の名前については、能の影響で、名前のなかつた化け物たちに名が与えられ、それが一般化していく過程を示した。伊藤慎吾「日本のサブカルチャーにおける「生ける屍」の展開―ライトノベルを中心に」は、現代日本の娯楽作品における「生ける屍」表現に合流する東西「死者」表象の文化史を整理した上で、主人公の不死能力にライトノベル的な表現の特色を見出す。

国内外の「妖怪」的なものに関する個別研究の蓄積は多い。しかし個別の研究のみでは越えがたい問題もある。その点、東西の「妖怪」的なものという共通テーマのもとに最新の研究成果を戦わせ、一冊にまとめることで外部へと問題意識を開いてくれる本書の意義は大きい。(今井秀和)

(二〇一八年七月/本体三三八〇円)

『魔除けの民俗学 家・道具・災害の俗信』

常光徹著 KADOKAWA 刊

俗信とは、予兆・占い・禁忌・呪いまじないに関する身近な知識や生活技術等の、主に心意に關わる伝承だと著者は定義する。その上で本書では、家屋敷、生活道具、自然災害にまつわるものを中心に取り上げ、魔除けや境界、異界、怪異、流言等について多角的に考察している。構成もこの三部立てになっている。

まず「家屋敷と俗信」では、屋根と床下、庭木、井戸に注目する。鳥が屋根に止まったり鳴いたりするのを凶兆とみる俗信は現代でもあるが、家人が氣を失ったり息絶えそうな時に、屋根の上で名前を呼んで生き返らせようとする魂呼び等の習俗は、昭和初期までであったという。大歳の夜に糞を逆さに着て丘の上から家や集落を眺め、翌年の吉凶を見たという俗信には「岡見」という季語も存在していた。四十九日の餅の棟越しは、その日に用意した餅の一つを表から裏に向けて投げ、棟に留まる死者の霊がそれを食して浄土へ旅立つと考える習俗だった。このような伝承から、屋根棟が一つの境界を示すという宮田登の論や、破風は神霊の世界との境界にあたる象徴的などころであり、神霊の出入口にもなったという森隆男の論を傍証し、屋根

と接する棟や破風を含めた空間が、他界との境界だと捉えていた人々の心意に迫っていく。また庭の樹木も、屋根より高くなるのを忌むのは、人々の制御できない空間との接触によって、邪悪なものが樹に取り憑くことへの不安が背景にあると説く。

「生活道具と俗信」では、箒、糞、鍋、柄杓が取り上げられる。箒には「払う、落とす、はずす、抜ける、追い出す」といった働きが期待されており、出産時に箒を逆さに立てたのは、産室に近づく物の怪を退散させて、安産を祈願したことによった。遺体の上やそばに箒を置くのも魔除けのためであり、箒は人生の重要な節目に深く関わり、境界の移行を速やかにするように促す道具として認識されていたと指摘する。鍋も人々の暮らしに欠かせないものであり、日頃から水を入れた状態に保ち、空にしておくのを忌む風があった。邪悪なものが入り込むのを恐れたからであり。鍋や鍋蓋の扱いにはいくつもの禁忌や決まり事があり、食の場を離れても、特定の死者の頭部に鍋やすり鉢などを被せて葬る「鍋被り葬」があった。盗人を生き埋めにする時にも同様にしており、再びこの世に生まれ変わらぬようにした呪法が紹介されている。

「災害と俗信」では、地震に対処する俗信が

説かれている。揺れを感じた時の「マンザイラク（万歳楽）」や「世直し」の呪文は、事態を転換する言祝ぎによって悪しきものを除き、地震を鎮めようとしたためだといふ。また高知県下で「カアカア」と叫んだと伝承されているように、自然災害に関わる俗信には動物を結びつける傾向があるようだ。「鯰が騒ぐと地震が起きる」や「雉が鳴き騒ぐと地震がある」等の俗信もあるが、尋常ではない豊漁を地震の予兆とみた近年の例もあり、動物の変化を察知して地震等の自然災害に対応しようとしてきた古今の人々の様子が描かれている。

「前兆には起源はない。それは人間自体と同じ歴史を有するものである」とのラドフォードの言を引き、藤高邦宏は、その意味で迷信や俗信は人間の心の歴史の一端を示すものと言っても過言ではないと綴っている（『英米人の迷信・俗信考』古来の信とその心を人と文芸に探る―二〇一六 ふうろう出版）。「一行知識」ともいわれる俗信は、民衆の心の歴史の一面を映し出すものなのだろう。俗信を長く探究してきた著者が、近世の書物や各地の伝承を中心に俗信を読み解く本書は、日本人が歩んできた暮らしとその心意の道程を丁寧に教えてくれる。

（菱川晶子）

（二〇一九年七月／本体一七〇〇円）

『聴く語る創る 第二十七号』
『自然と民話 ―蛙・柿・時鳥―』

日本民話の会編・刊

『聴く語る創る』は一九七八年から一九九二年までに五十号が刊行された『民話の手帖』の後継誌として一九九三年から刊行され続けている日本民話の会の機関誌である。機関誌であった『民話の手帖』が一般誌として市販され始めたのに伴いこの名に変更された。一九七〇年『民話の研究会』として活動を始めた日本民話の会の歴史については、二〇一九年に刊行された『聴く語る創る 二十八特別号 日本民話の会五十年の歩み』を参照されたい。本書『自然と民話―蛙・柿・時鳥―』は二〇一五年五月から二〇一七年二月までに行われた日本民話の会の例会報告をまとめたものに自然と民話に関する会員のエッセイを収録したものである。例会報告という性質上、論考という域までは達してはいないもののサブタイトルルなっている蛙、柿、時鳥をはじめ、鳥の聴きなしや雪、水の主からインドの事例、東日本大震災にまつわる報告まで、人を取り巻くさまざまな自然に関する事例報告やそれに伴う解説など、その内容は多岐にわたり、読みごたえのある冊子としてまとめられている。(武士田忠)

(二〇一八年十月／頒価一五〇〇円)

『復興と民話 ことばでつなぐ心』

石井正己・やまもと民話の会編
三弥井書店

東日本大震災が薄れだした今、「民話を通してふるさとの内発的な復興を図る山元町のすがたをお知らせしたい」とし、被災地の活動が二部構成で報告されている。第一部は「復興を支える民話の力」と題した講演とシンポジウムの記録である。「語り、聞く」ということは、自分自身と向き合うことであり、語り手と向き合うことであり、だからこそ深いつながりで結ばれる」とあるように、語り手と聞き手の両者にとって民話という手段は言葉にならない震災の体験を共有する術であることをのりこえ、民話を語りつぐ」とし、様々な震災の話の記録が収録されている。震災の記憶と思いをどのように伝承していくのか。復興というトインフラに目が行く。「そんな時に小野和子氏の言葉は示唆に富む。『復興といふ営みはなにか新しいものを生み出していくことではなくて、遠い先祖の昔から脈々と続いてきた人々の暮らしと、生きる力を限りなく再発見していくことではないだろうか。』

(二〇一九年三月／本体一七〇〇円)

(山田栄克)

『世界の教科書に見る昔話』

石井正己編
三弥井書店刊

本書は世界各国の教科書における昔話の状況を分野ごとに異なる著者が解説・考察するアンソロジーである。

タイトルは「世界の教科書に見る」であるが、諸外国の教科書だけではなく、日本の教科書における昔話の扱いの歴史も取り扱っている。そのため、日本の教科書の変遷という縦の軸、それを踏まえて外国の教科書における昔話の状況を通観することにより、日本の教科書と外国の教科書を比較するという横の軸で構成されていると見ることができよう。

日本でも諸外国でも、その時代のその国が抱える事情や教育方針などと教科書に採用される昔話は密接な関りがあることが示されている。各国の事情や教育方針などは当然異なるが、採用される昔話の傾向も異なるものの、民間の語りであった昔話にそれでのるの理想と言ふべきものを託す姿勢は共通であるといえるのは興味深い。

最終章は戦前・戦中の日本の教科書の昔話事典となっており、資料としても便利な一冊である。

(二〇一八年八月／本体一七〇〇円)

(藤井倫明)

『昔話とその周辺 語りながら考えたこと』

筒井悦子著
みやび出版刊

著者は、一九七四年に家庭文庫を開き、程なく、文庫の子どもたちに昔話を語り始めた。語りの場は、図書館や教育現場その他に広がり、語り続けて四十余年になる。「自分が好きな話を、概ね、本の中から探し出してそれを繰り返し練習して覚えて語っている」(本書一四一頁)所謂現代の語り手の一人である。一章で、五話の昔話について、語る昔話を選ぶためには類話を読み比べるだけではなく、昔話に込められた意味に気づくまで広く資料を渉猟する姿勢が窺える。一・二章を通して繰り返されるのは、昔話を聞く営みは、語り手と聞き手が喜びを分かち合うという深い意味を持つということ。それ故子ども心に深く働きかけるので、語りの言葉は大切であると説く。言葉について具体的言及はないが、著者には「子どもに語る日本の昔話全3巻」(稲田和子と共編こぐま社 一九九五年)があり、語り手たちに広く読まれている。日本にストーリーテリングが紹介されておよそ半世紀、語り手たちの経験が実践記録として本になる時代になった。(杉浦邦子)

(二〇一九年三月/本体二〇〇〇円)

『桃太郎は盗人なのか?』

—「桃太郎」から考える鬼の正体—

倉持よつば著
新日本出版社刊

公益財団法人図書館振興財団主催の二〇一八年度「図書館を使った調べる学習コンクール」で文部科学大臣賞を受けた作品を書籍化。著者は、当時小学五年生。前年も受賞し、副賞で貰った桃太郎関連書に記されていた福沢諭吉の桃太郎盗人説に衝撃を受けて調査を開始。二〇〇冊以上の本を読破、インタビューも踏まえ、鬼とは何かを考えた。結論は、鬼は心の中にいて、時に現れて来るが、それがないと人は成長しない。ここに至る過程で、桃太郎像の変遷や、果生・回春各型の桃太郎を知り、神や地獄の獄卒、疫病、歴史上の反逆者など、様々な鬼の正体説に接する。その探究心と行動力に脱帽。もちろん、創作も再話も評論も説話研究も一括りの扱いや、「民俗学者を含む多くの大人たちの思いもよらなかった」謎の解明という推薦者の言葉は気になるが、よしとしよう。むしろ我ががこの本の著者に質問されたなら、どう答えるべきかを深く考えさせられる。著者が支えた司書や学芸員の方々の献身的対応にも敬意を表したい。

(二〇一九年九月/本体一五〇〇円)

『生命としての景観』

彼はなぜここで妖怪を見たのか

佐々木高弘著
せりか書房刊

「怪異」が語りとして発生する場では何が起こっているのか。本書の主題はそれである。著者は歴史・文化地理学の視座から、近世後期・名古屋城下の狐霊の出現から祠の建立に至る事例を手がかりに、時代や地域を往還しつつ、怪異が現出する(場所の意味)を解き明かそうとしていく。そうした怪異の舞台となる「狂気の景観」は、その共同体が伝承し共有するその土地の記憶であると筆者は説く。人々が生活を営む現実の場所に込められた意味こそがその場所で怪異が現出するとされる必然性、開いて言うならば「あの場所ならばそういうことが起きるのもうなづける」という生活者の感覚なのである。本書は歴史・文化地理学の知見を踏まえることで、語りの生まれる背景にある(場所の意味)を丁寧に解き明かしている。その意味では本書の考察は怪異の語りだけでなく、現実の場所と紐づけられた語りである伝説・世間話の生成とも根深く関わりあつてくるはずだ。

(二〇一九年八月/本体三三〇〇円)

(飯倉義之)

『説話文学を拓く
— 説話文学と歴史史料の間に —』

倉本一宏編
思文閣出版刊

本書は、国際日本文化研究センターの倉本一宏氏の共同研究の一環として刊行されたものである。序に「歴史史料としてのアプローチと文学としてのアプローチの両サイド」からの説話の追究を心がけたとある。説話あるいは説話文学を、文字との関わりから歴史学に結びつけていくところに主眼がある。三十一人の錚々たる顔ぶれによる三十編からなる論文集であるが、口承文芸研究者は誰もいない。唯一、小峯和明の「歴史叙述としての説話」で、説話を「口頭伝承と文字テキストのまさしく交差する接点、境界領域こそが「説話」の本義であり、そもそも文字と語りの二元論を克服する媒体こそが「説話」なのである」と述べている部分、本書を口承文芸研究の立場から読むことで裨益するところは薄い。しかし、本書から「口承文芸」が今どのような立場にあるか確認する必要がある。

(花部英雄)
二〇一九年二月／本体九〇〇〇円

『流言のメディア史』

佐藤卓己著
岩波書店刊

本書は「メディアア流言」という、「正しさを規範とする広告媒体」と「あいまいさを本質とする流言」の複合を問題にする流言研究の書である。本書のタイトルには「流言」が用いられているが、本書で扱われているものには、「風評」「誤報」「陰謀論」「情報宣伝」「造言飛語」「怪文書」「隠蔽」「デマ」「風説」「神話」などの用語が含まれている。本書の白眉は第八章「汚染情報のフレーミング」で、「原子マグロ」の風評被害」で、流通する言説を「風評」とフレーミングすることの問題が明晰に分析されている。「風評被害」と名づけられることで、健康への懸念からビキニ水爆実験後にマグロを「買い控える」という行為に「非合理」「加害的」な意味が付与されてしまった、という指摘は、「流言」や「風評」という枠組み自体を疑うことを示している。SNSの発達した時代にあつて、メディアア流言を「歴史」として振りかえることは新たなリテラシーの獲得につながるといえる。

(山田敏子)
二〇一九年三月／本体九〇〇〇円

『山形県最上郡真室川と飽海郡遊佐の
話と暮らし 1970年代記録』

渡辺節子編・刊

編者の資料集作の姿勢は異色である。これまでの仕事を見てみると、ダムに沈んだ村の人々が語り伝えた「奥多摩の世間話」に始まり、『群馬県勢多郡北橋村 1980年代末〜1990年代初頭記録の村の暮らし』、『福島県赤湯温泉 今泉サダさんの話と暮らし』、『本書と続く。口承文芸と共に、暮らしの中のさりげない話を意識的に拾っている。本書の話者は、真室川が四人、遊佐が十七人。真室川の佐藤キヨエ女(明治三十一年生)は、昔話や体験談・見聞談など、七十九話。「カド(鯨)あるでしよう……あいつを出で食べ……運開きって言うのよ。……運開いて、いいことあるように」。このような話を拾い集めている。遊佐の菅原節子女(大正十二年生)は、昔話など五十二話。節子女の母・石黒雅子女(明治三十七年生)、菅原美英子(節子女の娘)、女系三代の昔話・謎・童歌・早物語などの伝承は興味深い。真室川・遊佐の「昔あつたけど」発端句、「とんびんからりねっけど(ねーっど)」「結末句」など昔話伝承も重なる。

(米屋陽一)
二〇一八年七月／自刊

『平湯今昔物語 奥飛騨の温泉と伝説と祭り』

愛知大学総合郷土研究所刊
 菱川晶子著

A5版六六頁。愛知大学総合郷土研究所ブックレットの一冊。岐阜県高山市の平湯温泉の生活・産物・伝説・祭りを、現地調査と文献で紹介。近世、飛騨高山から信州松本に至る街道は北アルプスの安房峠で国境を越えた。その麓の平湯村は交通の要衝で、湯治場でも有名だった。村には薬師と神明を祀る。大正期の地誌によると湯小屋と一四軒の家があり、稗・山葵などを栽培。極寒地のため、田に温泉の湯を引いて稗を育てた。この温泉は、飛騨に攻め入る武田氏の軍勢が、白猿の後を追って発見したという。全国に伝わる「動物の導き」型の温泉発見伝説である。こうした動物は、神仏の使いとも解釈されるが、本書によると、当地では山の神・山王など、猿に関わる信仰は見出せない。むしろ伝説の成立に關し、動物が実際に温泉に入る習性が示唆される。狼をはじめ、動物の民俗を追及してきた著者の判断は重い。その提言通り、地域毎の丁寧な検証が必要だろう。なお、当地の薬師像由来譚の社会的役割の分析も興味深い。

(二〇一九年二月／本体八〇〇円)
 (齊藤純)

『京都怪談巡礼』

堤邦彦著
 淡交社刊

本書は、江戸怪談に立ち現れる京都の怖い名所を訪ね歩くためのガイドブックである。ただ単なるガイドブックではない。江戸怪談研究の第一人者である著者の様々な知識と工夫が随所に見られる、今までになかった京都魔界の案内本と言っている。各章はテーマごとに、京都のさまざまな怪談とその舞台となる訪問地から展開されていく。江戸時代の様々な怪談が具体的に紹介され、解説も加えられているので、初学者にとってもあるいは専門外の研究者にとっても有り難い。さらに怪談集だけでなく、江戸時代の演劇や京都の地誌類や民間伝承、あるいは歴史的事件も詳しく紹介され、読み物としても楽しめるようになっていく。是非、この一書とともに京都の一味違う旅に出たい。

(二〇一九年七月／本体一六〇〇円)
 (佐々木高弘)

『八重山民話の世界観』

石垣繁著
 榕樹書林刊

沖縄県石垣島生まれの石垣繁氏は、八重山郷土文化研究会を設立し、精力的に八重山地方を中心とした研究活動を行ってきた。目次を示すと、第一章「パイパティロー」説話の世界観」、第二章「与那国島比川村の「天人女房譚」——銘苜口説を中心に」、第三章「宮古の英雄・金志川金盛は、八重山に生きる」、第四章「説話にみる「白保村の創設と再建」、あとがき、という構成になっている。四つの論文は、波照間島の人たちが人頭税のない南方の国を目指して脱島した話について、与那国島比川に伝承されている天人女房譚について、与那国の鬼虎征伐に加わった宮古の英雄「金志川金盛」の伝承について、石垣島白保村の創成神話と再建伝承について、それぞれ考察している。各種資料に加え、各島でのフィールド調査の結果を基に考察された各論考は説得力があり、興味深い内容となっている。本書は榕樹書林「がじゅまるブックス」シリーズの十四冊目となる本である。

(二〇一九年八月／本体一〇〇〇円)
 (原田信之)

『柳田國男と東北大学』

鈴木岩弓ほか編
東北大学出版会刊

柳田が「日本民俗学」と銘打って講義をしたのは、昭和一二年の東北帝国大学法文学部における集中講義が最初だった。二〇二一年の機縁に因み、哲学、宗教学、日本史学、比較文化学、国文学、国語学、言語学、教育学、倫理学など、幅広い分野の東北大学関係者により、柳田学を多角的に検討するシンポジウムが開催された。本書はその成果をまとめたもので、柳田國男の長男為正の伴侶となった柳田富美子の特別寄稿も収められている。柳田来学の経緯をまとめた第二章（鈴木岩弓）、集中講義を受講した国史学徒・大島正隆を追った第三章（柳原敏昭）のほか、野鳥（鈴木道男）、軍記物語（佐倉田泰）、方言（小林隆）、エスペラント（後藤斉）、社会科学（水原克敏）、死の記録（戸島貴代志）といった多様なテーマから東北と柳田の関わりが論じられる。哲学者・野家啓一による『遠野物語』の再読は、三二一以降の東北における柳田学の可能性／必要性を改めて訴えている（第一章）。

（菊地暁）

二〇一八年四月／本体三〇〇〇円

『折口信夫』

斎藤英喜著
ミネルヴァ書房刊

折口信夫を神道学者としての面から描ききった評伝。著者は折口のテキストを「同時代の神道家、神道学者たちとの同一空間に置き直す」ことよって徹底的に読み込み、折口の神道論が近代神道史の言説といかに相違したものであったか論じる。近代の神道論は国民道徳論と一体となったものであり、国家に管理されたのが近代の神社神道だとして批判したとする。また史料的には実証困難で虚妄の説とまで批判されることの多い折口の大嘗祭論についても、同時代の神道家の言説と通じる面を持つのみならず宣長や篤胤など近世国学の系譜にまで繋がりながら、大嘗祭における天皇は遠来の「まれびと神」であると同時にその神を迎える「神主」でもあったと説く点に独自なる点を見出す。さらには「人類教」を提唱し「既存者」なる概念を提示した戦後の「神道宗教化」論は、国家の管理下に置かれた神社の呪縛からいかに神々を解放するか、そこに折口の主張があったとする。これまでの折口信夫研究を一新する快著。

（保坂達雄）

二〇一九年一月／本体三五〇〇円

『怪人熊楠、妖怪を語る』

伊藤慎吾・飯倉義之・広川英一郎著
三弥井書店刊

本書は、二〇一六年に南方熊楠顕彰館で開催された特別企画展「熊楠と熊野の妖怪」を元に、その後の調査も踏まえて書籍化したものである。紀州和歌山に生まれた熊楠が、生物学者であり民俗学者でもあったのは周知の通りだが、その民俗学に関わる膨大な熊楠の著作や、残された手書きの資料等から妖怪に関する記述を拾い集め、関連文献や伝承地の写真を併用し、熊楠の怪異・妖怪への関心やその研究の軌跡についてわかりやすく解説している。妻の松枝や下女、床屋や銭湯で出会う身近な人々から聞き取りを重ねた熊楠は、多くの文献通読やそれとの比較によって研究を進めていく。また、自然観察に基づく科学的な見地から怪異・妖怪伝承を読み解こうとする熊楠らしさも伝わってくる。柳田國男との交流にも触れられ、最後には熊楠の妖怪語彙をまとめた付録がある。

熊楠が実際に歩いた紀州各地の現代の紹介では、希薄化しつつある妖怪伝承の現状が垣間見え、彼が生きた時代との隔たりをも感じさせる。

（菱川晶子）

二〇一九年八月／本体三三〇〇円

『忘れえぬ人びと——追悼文集——』

佐々木達司著
私家版

人と出会わなければ民俗の、まして口承文芸の調査や研究は成り立たない。それは当然である一方で、人との別れは必ずやってくる。書物はいつまでも手元に置けるのに対して、人との出会いは、やがて抗いようのない別れへとつながっている。著者は戦後の青森県における昔話研究のリーダーであり、本州最北の伝承をつぶさにとらえてきた。本書は故人への追悼文を連ねることで、その軌跡を示している。ここには本業の文学関係の編集・出版業で出会った人びと、また民俗と昔話研究の先達・同志・知友、そして昔話の語り手たちの横顔が鮮やかに描かれている。末尾におかれた、おそらく著者の原点である戦死した文学好きの優しい兄の思い出にたどり着くと、戦争によって絶たれた兄の可能性を筆者が自分なりに受け止めて、伸ばしてきたことに思い当たるのである。約半分を占める研究者と語り手の列伝が、青森県における昔話研究の重要な軌跡であるとともに、全体が、かけがえのない出会いの記録となっている。

(小池淳一)
二〇一九年七月／非売品

『高橋虫麻呂の伝承世界——異郷と伝承の受容と創造』

大久保廣行著
笠間書院刊

『万葉集』に「筑波嶺の囀歌会」「周准の珠名」「真間の手児奈」「菟原の処女」「浦島子」などの伝説歌を多く遺した万葉歌人を、「官人として異郷(他郷)に在る旅をどう受け止め、そこで出遭った景や風俗や伝承をどう歌として再創造したか」という点に注目して論じた書。上司の藤原宇合との関わりを通して、律令時代に境遇を落とし込み、これらの歌がどう詠まれたかに迫る。東国で見聞した「異事」を「伝説歌」として定着させたこと、水と関わる異界の存在としての女性像が、西国においては「菟原処女」に結実したこと、それらの集大成として「浦島子」が位置づけられるとする。自身が官旅を常とし異郷に身を置いていたことが、境界を超えて自己の意志を貫いた古代の伝承の民たちの生き方を、演えられたとする。また聴き手を意識も、口承劇的表現が取られているなどの指摘も、口承文芸研究として益するところが多い。

(根岸英之)
二〇一八年六月／本体一八〇〇円

『恋する赤い糸——日本と台湾の縁結び信仰——』

伊藤龍平・陳卉如著
三弥井書店刊

男女の縁を結ぶという赤い糸の伝承を軸に、日本と台湾の縁結びの信仰や俗信、恋愛観などを多面的に描いている。赤い糸(古くは赤縄)の最も早い記録は、唐代の伝記小説『続玄怪録』だとされ、日本には江戸時代に伝承されたのではないかという。縁結びの出雲大社を始め、赤縄が登場する近世の記録。さらに、赤い糸の初出といわれる太宰治の「思い出」から近年話題になったアニメ「君の名は」まで、資料を博捜し、その移り変わりの姿と赤い糸がおびている社会的な役割を論じている。台湾では、赤い糸は、縁結びの神である月下老人と結びついて流布している。月下老人が祀られている廟を訪ね、赤い糸をもらうことのできる資格や配られ方、使用方法など、その実態を詳しく分析して読み応えがある。赤い糸(紅線)の使用法はさまざまだが、小指に結ぶものという認識が形成されたのは一九九〇年代であろうという。台湾の歴史をふまえた婚姻史では、日本統治時代の影響なども論じられていて興味深い。

(常光徹)
二〇一九年八月／本体二五〇〇円

『関羽と霊異伝説』

太田出著
名古屋大学出版会刊

中国の商店に行くとき関羽の像を入口に祀っているのをよく見かける。商売繁盛の神様だと説明されることもあり、『三国志演義』の英雄・関羽がどうして商売の神になったのか不思議に思ったものだ。

本書は三国時代の関羽がどのような霊異を示して関帝帝君としてみがめられるようになってきたか、文献資料を精査して跡付けたものである。実在の人物が神となるには、濱島敦俊の①生前の善行②死後の霊異③皇帝の認証の三条件が必要だという説を基に、唐宋元明清の王朝ごとの関羽の霊異伝説を明示する。『三国志演義』第七七回の関羽の霊が「わしの首を返せ」という場面は有名だが、太田氏が提示される資料は清代の上論文にある戦いの場面に関羽が出てきて敵を攻撃したという霊威を語るものまで示している。

中国人の住む地域に関帝廟があり、商店の入口に祀られるようになった背景には、民衆の信仰心だけでなく各王朝による利用も含めたさまざまな要因があったことを具体的な伝説資料を述べて解きほぐしてくれる。

(繁原史)
(二〇一九年九月／本体五四〇〇円)

『図説世界の神話伝説怪物百科』

テリー・ブレヴァートン著
日暮雅通訳
原書房刊

本書は「はしがき」で著者自身が「楽しむために書いたもの」と言っているように、調べるための本というよりは、読んで楽しむための本である。全体を「謎の人物、奇妙な人物」「神話の怪物と亡霊」「不思議な場所」「空飛ぶ怪物と伝説」「深海のミステリー」「奇妙な人工物」「秘密の財宝の物語」「神話と伝説の真実」という八章に分け、それぞれ章ごとに項目が五十音順（おそらく原書ではアルファベット順）に並べられている。邦訳では「百科」になっているが、原題は *Phantasmagoria: A Compendium of Monsters, Myths and Legends* であり、怪物や神話、伝説を一覧できるように寄せ集めたものというような意味である。「ファンタスマゴリア」というのは、幻影や幻想を集めて、超自然的な光景を作り出す技法をいうらしい。その名の通り古今東西の様々な不思議な事柄が古いものから現代にも生きているものまで、十八世紀の投影シヨースナながら、次々と現れる。気ままに不思議な世界に浸るには格好の一冊である。

(美濃部京子)
(二〇一九年九月／本体四五〇〇円)

『語り継ぐ力 アイランドと日本』

奈良アイランド語研究会編
アイランドフューチャー奈良書店刊

本書は「アイランドと日本における伝承文学教育の文化創造可能性についての比較研究」と題された研究プロジェクトの成果報告をもとにまとめられた論文集である。

第一部は論文編で、アイランドと日本の自然崇拜とその保護、異界に関する三つの話の比較、詩人シェーマス・ヒーニーのアイランド語詩の翻案作品の分析、口承の昔話の語りの音楽的特徴などを扱った論文が並ぶ。

第二部は、アイランドの児童文学者コルマーン・オラハリと作家であり語り手でもあるエディ・レニハンとその息子のキース・レニハンを招聘して行ったイベント（講演・語り・コンサート）の報告からなる。

第三部はアイランドと日本で行ったアンケート調査の結果とそこから見られる伝承文学教育の現状とその意義についての考察が述べられる。全編を通して、伝承を現代社会においてどのように生かし、受け継いでいくのかが目向けられている。日本でも伝承教育を教育制度に組み込んでいけるのが課題であろう。

(美濃部京子)
(二〇一八年三月／本体一五〇〇円)

『愉しき夜 ヨーロッパ最古の昔話集』

ストラパローラ著

長野徹訳
平凡社刊

『ドナウ民話集』

パウル・ツァウネルト編

小谷裕幸訳
富山房インターナショナル刊

ヨーロッパの昔話の重要な原典を日本語で読めるのは喜ばしい。「バジール、ペロー、グリムと繋がるヨーロッパの昔話文学の源流」として位置づけられる「ストラパローラの短篇物語（ノヴェツラ）集の初訳である。ストラパローラはルネサンス期のイタリアの作家・詩人。『愉しき夜』（第一巻一五五〇年、第二巻一五五三年）は、杵物語の形式をもち、全七三話からなるが、本書はそのうち「特に昔話風の」二六話を収める。一後の時代の昔話集やお伽噺集といったジャンルに先鞭を付けた」ストラパローラ、その昔話は「昔話とノヴェツラの両者の特徴を併せ持」つということが、読んでなるほどと思う。「解題」では各話について、A・T・Uによる話型、各国の民話集、説話物語集・童話集にみられる類話、特徴的なモチーフ等が指摘され、比較研究に役立つ。ストラパローラという名前は「とりとめのない話をする」「放言する」というイタリア語の動詞に通じ、ペンネームと考える向きもあるといい、作家の名前からして「おはなし」のようで愉しい。（間宮史子）

(二〇一六年六月／本体三二〇〇頁)

編者ツァウネルトはドイツの民俗学者・口承文芸学者で、デイーデリヒス社の「世界文学のメルヒェン」の立ち上げに関わった。原書はそのシリーズの一冊『ドナウ川流域ドイツ語民話集』（一九二六年、本書は一九五八年版を使用）である。「ドイツ〔語圏〕南東地域」、すなわち、オーストリアの七つの州、ハンガリーのドイツ語島ハヨシュ、ルーマニアのジーベンビュルゲン（トランシルバニアのドイツ語名）に由来する百話を収める。ドイツ語といたっても、それぞれの土地ことばで語られ記録された民話、翻訳は難澁を極めたというが、訳文はなめらかで読みやすい。訳者解説では「比較民話学的視点から見た本書の特長」が考察される。テーマごとに、他文化圏の類話とともに、日本の昔話、落語、説話集などにみられる類話の指摘もされるが、『国際昔話話型カタログ』（A・T・U）に言及がないのは残念に思う。「説話でつながる世界」では、古代インドの説話集『カター・サリット・サーガラ』の重要性が強調されている。（間宮史子）

(二〇一六年七月／本体四八〇〇頁)